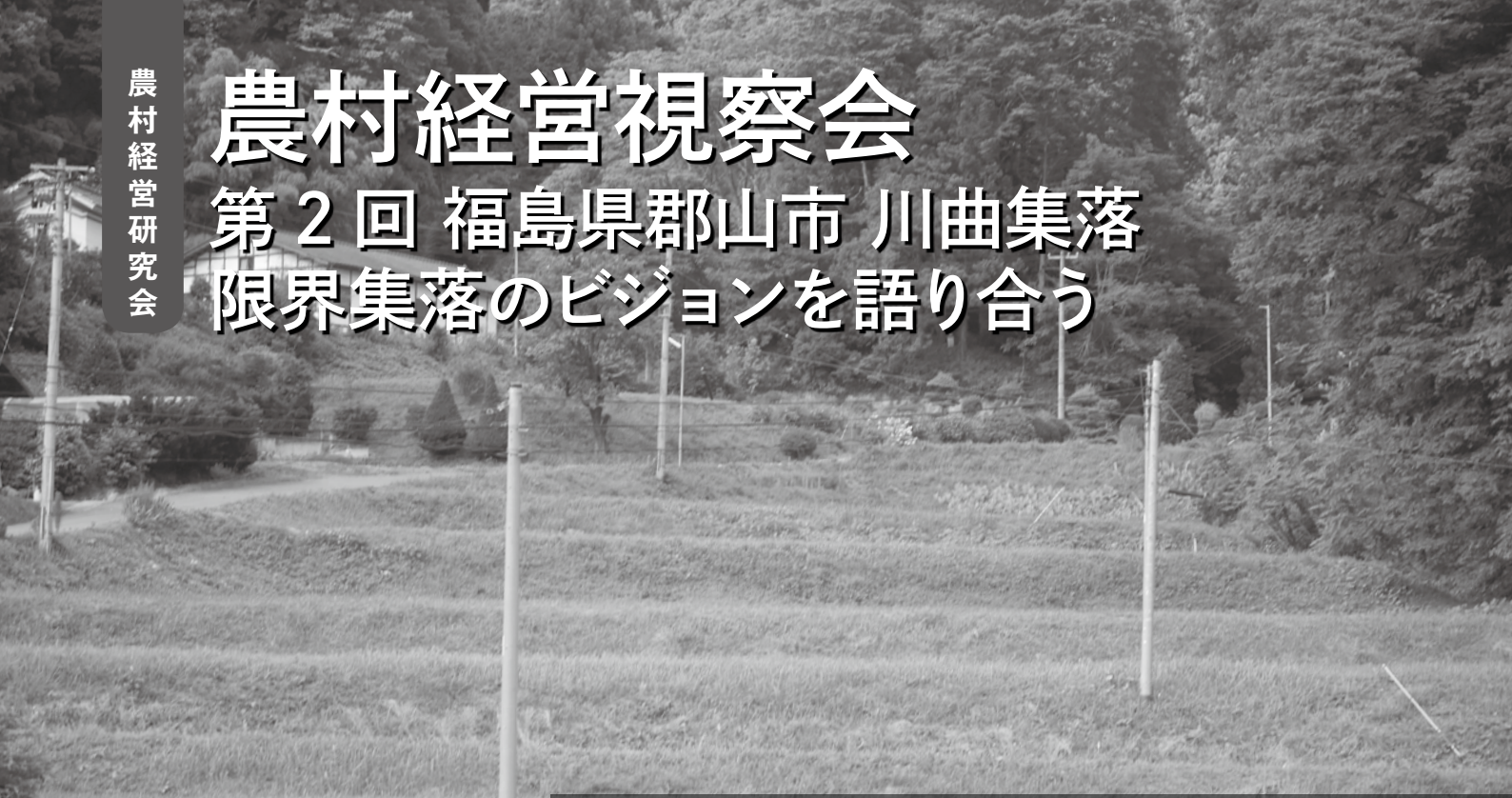
農村経営視察会
第２回 福島県郡山市 川曲集落
限界集落のビジョンを語り合う



㈱農業技術通信社は７月２日、農村経営研究会 第２回視察会を福島県郡山市の川曲集落で開催した。５月 29 日の定例研究会で報告された川曲集落の農業経営者、ふるや農園の代表取締役　降矢敏朗氏の住む川曲集落の地域再建の取り組みを視察するとともに、地域の活動メンバーらとの座談会を行なった。

（取材・まとめ／平井ゆか）

川曲集落は、福島県の太平洋側を南北に走る阿武隈高地に沿った中山間地の農村である。郡山市は人口33万人の福島県最大の都市で、ＪＲ東北新幹線郡山駅は１日に約９千人の乗降者数がある。川曲集落は、その郡山駅から車でわずか20分の距離にあるにもかかわらず、過疎化と耕作放棄地の拡大が進んでいる。さらに、原発事故以来、若い世代の流出が起こり、風評被害による農産物の買い叩きが深刻化している。

降矢氏ら川曲集落の活動メンバーは、東日本大震災前から、タバコやクワの耕作放棄地の整備や、炭焼き窯作り、花壇づくりなど集落の再建に取り組んできた。また、草木の根を掘り起こして食べる豚を放牧するという方法で、耕作放棄地の開墾をはじめた。現在、その豚肉や豚肉の加工品などの販売も手がけている。開墾した畑には、野芝を植え、新たな農村景観を作ろうと試みている。

農村経営研究会は、かつて、大量消費地にものを送り込む産地という役割であった農業・農村の姿から、顧客を巻き込み新たな農業・農村を創り上げる可能性を追求している。

今回、農村経営研究会は、川曲集落のメンバーとともに川曲集落の放牧養豚の取り組みと川曲集落の風土の魅力を生かし、福島のこの地に外から顧客を呼び込むことはできないか、また、地元や県内の異業種が協働することにより地元や県内の顧客とすることはできないか、ということをテーマに視察会を展開した。

山と棚田が織り成す緑の風景と放牧養豚の村、川曲集落

視察は、降矢氏夫妻（妻・セツ子氏）の案内で、郡山駅からスタートした。視察会のメンバーを乗せたマイクロバスは、ビルが立ち並ぶ市街地を背に坂道を登り続ける。途中、阿武隈川にかかる橋を超えると、アップダウンを繰り返しながら標高４００ｍの川曲集落へ向かって登り続け、ほどなく農村地帯に入った。

川曲集落に近づくと、道路の両側に山が迫り、山と道路との間に１枚ずつ水田が並んでいる風景が続く。山と水田の間には、かつて養蚕のために植えられたクワが放置されたまま数メートルの樹木に育ち雑木林を成している。

集落の端に位置する放牧養豚場は、降矢氏の営む農園のハウスを見下ろす山際にあった。数頭の豚が、敷地内を気ままに歩き回ったり、泥水を浴びたりしている。泥水を浴びるのは、暑い日差しで上昇してしまう体温を調整するためである。視察会メンバーが近づくと、ゆったりと

した動きで興味深げに寄ってきた。子豚数頭は放牧場内の柵の中で飼われているが、それでも柵の端まで寄ってくる。セツ子氏が「おいでー。おいでー」という声をかけると、豚は、一斉にその声のほうに歩いていく。豚の人懐っこさに、視察会メンバーもしばし童心に返って楽しんだ。

放牧された豚は、草木の根まで掘り起こして食べ尽くしてくれる。放牧による耕作放棄地の開墾ができるのはそのためである。放牧の他に、餌は、農園のハウスで作っている野菜の残渣、餌米、トウモロコシなども与えているという。

放牧養豚場を発ち、続けて集落内を巡った。集落の道は、登っては降り、登っては降りと、狭い道幅の急勾配の坂道が続く。その勾配に沿って、昔ながらのふぞろいの形をした棚田が並ぶ。道端には手入れが行き届いた花が色とりどりに咲き、アクセントを加える。

降矢氏は、集落の見所を案内してくれた。集落で最も古くからある桜の大木、木々に囲まれひっそりと佇む熊野神社、集落の多くが檀家であるという寺、２千頭の肉牛を飼育している大規模な牛舎、家々に隣接された養蚕のための蚕室。山側の集落を抜けて道を下ると開けた場所に出る。山側の集落を背に道路を挟んだ反対側には、集落唯一の平場の水田が広がっている。山側の棚田と平場の水田との間にあるこの場所が、川曲集落の中心部である。

この中心部にある集会所で、視察会メンバーと川曲集落の再建活動メンバーとの座談会を行なった。

30年後のビジョンを描き、そこに向かって活動する

集会所で行われた座談会には、降矢氏を含む川曲集落の再建活動メンバー、郡山市役所職員、農村経営研究会の視察会メンバーを含め、計23名が参加した。

はじめに、本誌編集長の昆吉則が、農村経営研究会の趣旨と、今回のテーマとして「福島のこの地に共感をもってくれる顧客を呼び込む」「地元や県内の異業種が協働することにより地元や県内の顧客とする」の２点を示した。また、行政の合理化により市町村が合併され、地域の意志が失われていく時代にあっても、川曲集落はこうありたいという明確な展望があれば人や企業が集まるだろうと語った。

続いて挨拶した降矢氏は、川曲集落について、人口３１４人、戸数83戸という限界集落で、さらに人口の減少と高齢化が進んでいること、農









1 車中で集落を案内する、ふるや農園代表取締役 降矢敏朗氏。
2 泥水を浴びる放牧豚。
3 降矢氏の農園前の手入れされた紫陽花。
4 呼ぶと寄ってくる豚。

第２回 福島県郡山市 川曲集落
限界集落のビジョンを語り合う





5 川曲集落の方々との座談会。

6 農村経営研究会アドバイザー、カルビー㈱相談役、NPO法人「日本で最も美しい村」連合副会長松尾雅彦氏。松尾氏から提案があった30年後のビジョンについて、７月２５日に東京都新宿区高田馬場で開催される農村経営研究会 第２回定例会議で検討を行なう。

村とはいえ専業農家は2軒のみで他は兼業農家として町で会社に勤務し生計を立てていることを説明し、この集落を良い方向に向かわせたいと話した。

川曲集落からは降矢夫妻を含め7名が参加した。川曲集落のメンバーからは、「現在の状況を寂しく思う」「雇用が生まれると良い」「農業を継ぐ息子のために足固めをしたい」などの話があった。

視察会メンバーからは、「川曲集落は水がきれいで昼夜の寒暖差もあり、おいしいコメがとれるだろう」「若い世代の労働力を確保することが大切だろう」などの意見が出された。また、昆からは、「供給過多のコメではなくトウモロコシを植え、収穫せずに、そこに豚を放牧し餌としてはどうか」という案が出された。郡山市役所からは、制度上の諸注意として、市民農園の作物の販売は禁じられていること、既存の蚕室などの設備を使う場合は保健所と消防法に準じる必要があること、農地に新たなに設備を建設することは、農地法、農業振興地域制度、農業振興地域の整備に関する法律、都市計画法の３つの法律により制約があることが挙げられた。

農村経営研究会のアドバイザーとして参加した、カルビー㈱相談役でNPO法人「日本で最も美しい村」連合副会長の松尾雅彦氏より、「ビジョン」を創ることの重要性と、風評被害に遭っている福島県全体を含めた農業の展望について次のような提案があった。

①30年後のビジョンを描く

若い世代とともに、30年後のビジョンを描くことが大切である。30年後の夢、つまりゴールを描き、何をしたらそのゴールに行けるのかを考える。そのためには、良い例である欧州の農村を見ることが必要である。欧州の農業は米国に押されて40年前に一度は破綻した。EUとしての現在の欧州を視察することを勧める。欧州は現在、農業、酪農、林業が協力し、エネルギーの分野で自立しようと試みている。

②福島県の難問を逆手にとった農業

現在の農業は、TPP、減反廃止、農村の人口減少という難問を抱えている。福島県の場合はさらに風評被害が加わる。これを逆手にとることを勧める。

農村が個人プレーをしているうちは、問題は解決しない。良いコメを作っても、他の人から売上を奪うだけである。これは、需要量と供給量によって価格が決まる米国の市場経済のしくみを取り入れているためだ。

一方、欧州には新しい経済の仮説を持ち、各村がどう自立するか。共同で作戦を立てている。その仮説とは「家政と互酬」。家政は自給自足。互酬は生産者と消費者が話し合って双方が良くなるウィンウィンのしくみである。

おいしいものは、地元で食べてもらうというしくみ作りを勧めたい。地元の人が食べるものの50％は、地元で採れたものということを目指すと良いだろう。福島県の多くの人は風評被害に遭っているため、農家と苦労を共にして手を結んでくれるだろう。豚肉や農産物は、輸入原料を使っている商品の代わりに地元で販売することができるだろう。そのためには、栽培から加工、サービスまで指導する人が行政にいることが必要である。

孫子の代の将来、お父さんたちの世代がいいことをやってくれていたと思ってもらいたい。（以上、松尾氏の提案の概要）

降矢氏は、座談会の最後に次のようにコメントした。

「目先のことではなく、自分がいなくなった後をイメージすることの大切さがよくわかった。そのことがわかっただけで、今日は大収穫であった。今後も引き続き協力を願いたい」